

福富雅樹・短編集 1

福富雅樹【著】

目次

百円玉	一頁
慣れない電話	十三頁
山村	二十三頁
人形	三十頁
乞食	三十八頁
鉛筆	四十五頁
道	五十一頁
占いおかみ	五十九頁
松	七十二頁
つくえ	八十二頁
ハッピーエンジェル	八十八頁
空を飛ぶ夢	百六頁

百円玉

もし、あの時、私のポケットに百円玉が一枚でも入っていたら――
私は今でもそう思う時がある。

私の今の生活が「最低」とするならば、五年前が「最高」ということになる。
五年前――そう五年前、私が知り合った一人の女性。彼女が私の運命を変えてしまった。

当時、私は二十六。大学を卒業し、外資系の企業に入社して四年目の年だった。

そして、彼女は二十二で、町の小さな印刷会社に勤めていた。

私が最初に彼女を見掛けたのは、帰宅途中の公園だった。

彼女はブランコに乗っていた。ただ揺れながら、どこか遠くを見つめていた。
彼女は美しかった。さらっとした黒い髪。邪心のない瞳。薄いピンク色の口紅をつけた小さな口。色白の肌。支えてあげたくなるような細い体つき。まるで

人生を重荷を一身に背負っているような弱々しい女性だったが、なぜか私には温かい優しさを感じさせた。

私はその光景を何度も見かけた。

彼女とは別に面識があるわけでもなく、赤の他人だが、なぜか私は日に日に帰路の公園で彼女の姿を見ることが楽しみになっていった。

私が彼女に声をかけるまでに一週間とかからなかった。

私が彼女に初めて声をかけた時、彼女はまるで驚いた様子はなかった。それどころか警戒心のない目で私を見て、ニコツと微笑んでくれた。

この笑顔の意味は今でも私には分からない。ただ、口下手のあまり女性とはほとんど付き合いもなく、ただ仕事一筋に生きてきた私にとつて、この笑顔は非常に衝撃を与えた。新鮮で、爽やかな気持ち。心がときめき、うきうきと何かがこみあげてくるのを感じた。

その日は結局、軽い会話で終わったが、次の日から毎日のように公園で話をするようになった。

彼女はあまり自分のことは話したがらず、どちらかといえば私の話を黙って聞いていて、時々、それに対して何かを言うという感じであった。無論、私は

それでも充分、楽しかった。ただ、彼女は決して私のデートの誘いには乗ってくれなかった。公園で会う時はいつも話し相手になってくれるが、ただそれ以上は何もなかった。

しかし、一度たりとも彼女は公園に来ないということがなかったため、そんな不満はむしろ私のわがままだとして打ち消した。

そうして、二週間が過ぎた頃、私は彼女との話の中で、つい「結婚するなら君のような人になりたい」と口に出してしまった。

私自身、口調は冗談まじりだったが、心根はかなり本気だった。

「……」

彼女は私の言葉を本気と受け取ったのか、冗談と受け取ったのか、一度唇をきゅつと結んだ。

特に気を悪くした様子もないが、彼女は私の言葉を真剣に受け取っている。私には何となくそう思えた。

「もし、よかったらー」

しばらくして、彼女は呟くように言った。

「え？」

私は戸惑った。もしよかったら、結婚してください。彼女はそう言おうとしたのだろうか。いや、それは希望的観測だ。恐らく、私の言葉を冗談と受け取って、彼女も冗談でそういったに違いない。知り合って、まだ二週間。結婚なんて、そんな簡単に決まるものじゃない。

私の頭の中の思考を遮るように、彼女が言った。

「もし本気だったら……いいわ……」

彼女の言葉じりは弱々しかった。

「君……」

私は彼女をじっと見つめた。すぐにでも彼女を抱きしめたい気分だった。

「今度の月曜日、つきあってほしいところがあるの……」

彼女は思い詰めた口調で言った。

初めてのデートの誘いだった。

「いいさ、どこへでもつきあうよ」

私は何も考えずにそう答えた。

そう……それがあまりにも安易な考えだった。彼女の約束は午後七時、横浜港の第七倉庫の前。

だが、私はその日に限って、重要な会議で早退が出来なくなった。社を出た時はもう五時を過ぎていた。

ここから横浜までなら、二時間もあればいける。それにいざとなれば、彼女が渡してくれたメモに書いてある喫茶店に「遅れる」と連絡を入れればいいのだ。

それは単に自分に言い聞かせてるだけだった。本当なら、すぐに連絡を入れるべきだった。だが、私には、彼女に嫌な思いをさせたくないという気持ちから、それができなかった。

午後五時三十分、私は当初の予定が大きく狂った。タクシーが全く捕まらないのだ。

私は業を煮やして、地下鉄の駅に駆け込んだ。

私は駅の改札で発車のベルを聞くと、慌てて走り出した。階段を駆け降り、今にもドアを閉めようとしている地下鉄に乗り込もうと勢いをつけた瞬間、私は一人の男にぶつかった。

「どこ、目えつけてんだ!!」

男のドスのきいた声で怒鳴ると、私の胸ぐらを掴んだ。その男は目の鋭さや髪型からヤクザだと思った。

だが、今の私には開いているドアへの執着が異常なまでに強かった。私はとっさに背広の胸ポケットにさしてあったボールペンを男の腹めがけて、思いっきり刺すと、ぐいぐいとねじ込んだ。

それはほんの一瞬だった。

男がその場に腹をおさえて、うずくまると、私は素早く電車に乗り込んだ。電車はすぐに発車した。中の客は私が男を刺したことなど、まるで気付いていない。

私はホームで倒れているあの男の姿を見ないようにした。

午後六時三十分。私は横浜駅に着いた。

警察に手配されている様子はない。

私は男の安否など全く眼中になく、駅を出ると、すぐ路上で客待ちをしていたタクシーを拾った。

その時、一枚の百円玉が私のポケットから落ちた。

その百円玉はチリーンと小気味よい音をたてて、アスファルトに落ちると、そのまま私から離れるように転がっていった。

私は別段、気にも止めず、タクシーに乗った。

どうやら間に合うぞ。私は腕時計を見て、ようやくホツと息をついた。少し遅れても彼女なら許してくれるさ。とにかく後少しだ。

私はシートに体を任せ、ふっとフロントガラスを見た。

ちようにど交差点にさしかかった時だった。

あっ!!!

突然、一台の乗用車が目の前に現れた。

タクシーの運転手は車をかわそうと、ハンドルを切った。だが、間に合わなかった。車は激突し、私はその勢いで後部座席から前のフロントガラスを突き破り、路上に弾き出された。

「ぐわあ」

私は地面に叩きつけられたショックで呻いた。

畜生、信号無視して右折なんかしやがって。

私はタクシーにぶつかった衝撃でガードレールまで飛ばされた車を睨み付け

た。

ううつ、体が痺れる。全く体の自由がきかない。

私は体を這うようにして、車道から歩道の中へ入った。

電話だけでも……

私はメモを握りしめ、何とか立ち上がると、タバコ屋の前にあった二台の電話機に向けて、体を引きずりながら歩いた。

一台の電話機は一人の老婆が使っている。

私は漸く電話機の傍まで来ると、左手でポケットに手を入れた。

ない！！財布がない

私はその瞬間、愕然とした。

あの男とぶつかった時、落としたんだ。

私は全てのポケットを調べたが、小銭すらなかった。

そんな時、隣では老婆がたくさん硬貨を手にして、一枚ずつ電話機に入れながら、親しげに話している。

ふざけやがって

私は嫉妬とあせりから、老婆の硬貨を無理矢理、奪い取った。

「コラッ！何するだ」

「貸してくれ。俺には時間がないんだ」

「ドロボー、ドロボー」

老婆は私の言葉に耳も貸さず、わめき散らした。

チッ！

私は弁解する気にもなれず、その場を逃げた。

だが、この体ではどうにもならず、午後七時、ついに私は彼女に会うことも出来ず、警察へ連行された。

約束が果たせなければ、もう私にはどうでもよくなっていた。あらいざらい、全て白状した。

警察の話で私の刺した男が死んだことがわかった。

私は素直な態度に、警察は特別に彼女に私のことを伝えてくれることを約束してくれた。

私は彼女の約束を破ったばかり、さらに私が逮捕されるというつらい思いを彼女にさせるのかと思うと、ひどく気が咎めた。

その夜は拘留所の中で、彼女の悲しい顔が頭にこびりついて、眠れなかった。

翌日、彼女の水死体が横浜港で上がったと警察に知らされた。

私はその時、絶望のあまり、叫び声を上げた。

私という人間の全てを憎んだ。殺してやりたいと思った。

何も考えたくない。何も考えたくない、私の頭の中から、全ての思考を取り去ってくれ。

私のそんな思いが絶叫に走らせた。

私は数日、拘置所の中で、獣のようにわめいていた。声がかれ、しまいには蚊の鳴くような声しかでなくなっても、わめくことをやめなかった。

そのわめきのせいで、今ではもう私の声は出なくなってしまった。それからしばらくして、ようやく私が落ち着いた頃、警察から彼女のことを聞かされた。彼女は明らかに自殺で、遺書らしき物も持っていたということだった。それには走り書きで

来てくれませんでしたね——さようなら

とあった。

彼女は沖繩の出身で、家族に仕送りをするために一人上京して、一月前まで印刷会社で働いていたが、つきあっていた男のために横領を働き、その金を全て男に持ち逃げ去れたあげく、警察沙汰にしないかわりに責任を問われ、会社をクビになつていたのだった。

考えてみると、あの時の彼女は絶望のどん底だつたに違いない。それなのに、彼女は私に対して嫌な顔一つせず、親身に話を聞いてくれた。

彼女が私のデートの誘いを断つたのは、自分の本当の姿を人に知られたくなかつたからなのだろう。

だとすれば、彼女とのあの約束は私に全てを打ち明けるためだったのか。そして、結婚はできないから、別れてくれというつもりだったのか。

私はそうは考えたくない。

彼女は自分の過去を打ち明けたうえで、自分と結婚してくれるかどうかを私に問うつもりだったのだ。

だが、私は約束を破った。彼女は裏切られ、人生に絶望を感じ、自殺した。もし私が行けば、彼女は死ぬことはなかった。それだけは間違いない。

ふふふ、今更言ったところで、もうどうしようもないことか。

あの時、落ちた百円玉が私の運命を決めたのだ。一円を笑うものは一円に泣くなどというが、今度のことはまさにそれだ。

今は冷たい刑務所の中。

私は暇さえあれば、一枚の百円玉を床に落として遊ぶが、落ちた百円は未だに私から逃げるように、反対側へ転がってゆく。

慣れない電話

あなたは自分の家の電話から自分の家の電話番号に電話をかけたことがありますか。

もし、かけたことがあるなら、そんな時、どんな気持ちになりますか。例えつながらはずかなくと分かっていても、もしもつながったら、と言う時のことを多かれ少なかれ考えてしまうのではないでしょうか。そして、そんなことを考えている時に、本当につながったら――

その夜は、珍しく眠れなかった。特別、蒸し暑いわけでもなく、といって寒いわけでもない。また、寝る前にコーヒーを何杯も飲んだわけでもない。

午前二時五分――私はベッドに寝そべって、読みあきた漫画に何度となく目を通していた。

普通の家庭なら小学五年生の私がこんな遅くまで起きていたら、両親に怒られるところだけど、うちは母子家庭で、母も看護婦だから夜勤の時はうちにいない。おかげで小学校一年になる弟の世話は私一人でやっている。

二段ベッドの上の段では、弟が寝息を立てて、気持ちよさそうに眠っている。時々、寝言なんかを聞くと、下からベッドを蹴り上げてやろうかという気分かられる。

いつこうに眠気のささない自分にイライラしてきた時、ふと電話が目に入った。うちは各部屋に電話の子機があるので、どの部屋からでも電話がかけられる。

”もし家から自分の家に電話をかけたらどうなるだろう”

その時の私はよっぱど暇だったようだ。普段なら考えついても、バカらしくて絶対やらないようなことを思いつくのだから。

私は受話器を外し、何となく自分の家の電話番号を押した。

当然のことながら、つながるはずはなかった。

私はちよつとでもつながるのではないかと期待していた自分に腹が立った。不機嫌に電話を切ろうとした時、電話のプツツというつながる音がした。

「え!?!」

私は思わず、受話器を耳に当てた。

しかし、私に耳に飛び込んできた声はその期待とは裏腹に衝撃的だった。

「助けて!!!」

私の耳をつんざいたのは子供の悲鳴であった。

「ねえ、今、どこにいるの? 怖いよお」

電話の子供の声はひどくおびえていた。

「ねえ、ボク? どうしたの? 何かあったの?」

私は心配になって呼びかけた。

しかし、電話の主には私の声が聞こえないのか、返事は戻ってこない。

「へへ、へへへ……」

その時、男の気味の悪い笑い声がした。途端に、バサツという小さな物音が

聞こえた。何か物を投げているらしい。

「怖いよお。助けてよお」

子供の涙まじりの願いが続く。

「へへへ、助けはこないよ。おまえは俺の血となり、肉となるんだ、ひひひひ」
男のじりじりと詰め寄る物音が異常なくらいよく聞こえてくる。果たして、刃物を持っているのだろうか。

「や、やめて！！警察、呼ぶわよ」

私は電話口に向かって思わず叫んだ。

その瞬間、

「ぎゃあ」

という悲鳴が聞こえた。私はやりきれなくなつて電話を切つた。

辺りが急に静まり返つたようだった。あの子は大丈夫だろうか、と不安をつのらせながら額の汗を拭いた。

ふと見ると、弟のあつしがベッドから体を半分乗り出して私を見ている。

「な、何よ」

私がつまどつた顔で言うと、

「頼子、声がうるさい」

と文句を言つて、また寝てしまった。

「頼子つて言うな、頼子つて。これでもお姉ちゃんだぞ」

全く姉の気持ちを分かつていない弟である。

結局、その夜は全く眠れなかった。翌朝、学校に行つてからも子供のことが気になつて、勉強にならなかつた……つて、それはいつものことか。けど、そうかといつて私にはもう一度、電話をかける気にはなれなかつた。

もうあんな悲鳴は聞きたくない。

また、夜がやつて来た。

今日こそは早寝しようと、早めにベッドに入ったのに、子供のことが気になつてやつぱり眠れない。

午前二時。弟の方はベッドに入つて五分もしないうちに寝てしまったというのに私はまだ起きていた。

「ええい、悩んでも仕方がない」

私は思い切って受話器を取り、再び自分の家の電話番号を押した。どうかつながらないでというかすかな思いも実らず、電話はつながった。

「ぎゃあああ」

私は耳をおおってしまった。途端にグサツと物を刺す音がいともリアルに聞こえてきた。

「ふふふ、ぼうやを一発で仕留める真似なんかしないぜ」

男は楽しそうに言った。

「ボク、大丈夫？」

私の声も空しく、男が子供に切り付けている音が耳に響く。そして、それに交じって、悲鳴が聞こえてくる。

「いたいよお」

私はたまらなくなつて電話を切ろうとしたその時、

「頼子、助けて……」

という声でした。

「しつかりして!!」

と私は叫んだものの、それきり電話からは子供の声が消え、物音だけが聞こ

えた。しばらくして、

「次は、お前の番だ。へへへ」

という男の声で電話は切れた。

私はその場でぼう然としていた。そして、顔から血の気がひいていくのを感じた。

「どうしたの？」

上のベッドからまた弟が私をのぞき込んでいた。

「子供が殺されたの……」

「ふうん」

と弟はうなずきながら、「昨日といい今日といい、頼子、刑事ドラマの見過ぎじゃないの。早く寝ないとまた遅刻するよ」と暢気に言った。

「うっさいわね、頼子じゃなくてお姉ちゃんって言いなさい」

全く人の気持ちを分かっていない弟である。

三日目の夜が来た。

その日は朝からずつと子供が電話で最後に言った「頼子、助けて……」という言葉が気になっていた。

その日は塾があったため、私は学校から直接塾へ行った。しかし、勉強に集中できず、やっぱり電話のことを考えていた。

思えば自分の家の電話から自分の家へ電話をかけてしまったことから起こったことなんだけど、それにしても、なぜあの子の家の電話につながったんだろう。昨日、今日の新聞にも殺人事件の記事は載っていなかったし。

あれ、ちよつと待って。「頼子、助けて……」って言葉、今考えたら、変。私を頼子なんて呼び捨てにする生意気な子供、この世に一人しかいないじゃない。弟のあつし……。

けど、あの電話をかけた時、弟はそばにいたし。でも、あの電話の子供の声、今考えると弟の声に似てる。一体、どういうことなの？

その時、私に恐ろしい考えが浮かんだ。

あの電話は私の家から家にかけたんだ。だから、弟が電話に出たっておかしくない。

私は教室を飛び出し、廊下の公衆電話から家に電話をかけた。

その時、私は察していた。当然、こういう結果になることを――
「誰か、助けて！」
あつしの叫びが受話器から聞こえてきた。

「お嬢ちゃん、お手柄だったね」

刑事が私の頭をなでた。

「え、ええ」

私は少し照れてはにかんだ。

「君の弟は切り傷が少し負っただけだから、入院しなくても一緒に家に帰れるよ」

「そうですか」

私はほっと胸をなで下ろした。

私は病院の待合室にいた。

電話の声はやはり弟だった。私は弟の悲鳴を聞いた後、一旦、電話を切り、すぐに警察に電話をしたおかげで、弟は間一髪自宅に駆けつけた警察に命を救

われた。

犯人は詳しくは分からないけど、数日前に精神病院を脱走した男らしいと言
うことだった。

「頼子！」

弟が母と一緒に待合室に現れた。

弟は私に抱きついた。

「頼子、すごい怖かったんだよ」

「わかってるよ。でもね、お姉ちゃんはもつと怖かったんだよ。お姉ちゃんは
あなたのもう一つの未来を見ちやっただから」

私は弟を強く抱きしめた。

しばらくは頼子って呼んでもいいよ、あつし。

山村

僕がI県のN村に着いたのは、もう日が半分昇った時だった。僕の理想は夜明け前の到着だったのだが、何せこの9月という月はまだまだ夜が短い。真つ暗な山道を自転車で夜通し走り続けたにもかかわらず、結局はその努力は無駄だった。

「あーあ」

僕は自転車に乗ったまま、太陽を前にして、体をいっぱい伸ばし、大きな欠伸をした。

「ううん……」

後ろの席で僕の背中を枕に寝ていた妹が目を覚ました。

「お兄様、もう着いたの？」

「おう。でも、残念なことに夜明け前には着かなかった。せつかく、美代に日の出を見してやろうと思ったのにな」

僕はがっかりして言った。僕は日の出を見て感動する妹の笑顔が見たかったのだ。

「明日、見ようよ」

妹は別にながかりした様子はなかった。

N村の村人に声をかけ、宿を紹介してもらうことにした。

「この村には宿はねえよ」

と村人は言った。

「なぜえ？」

僕は詰め寄った。

「ねえもんはねえんだ。いやなら、帰れ」

「来てしまつて、すぐ、帰るのは何とも寂しいじゃないですか」

「おまえさんはどうしてこの村に来たの？なんにもねえのに。この村は人口100人しかいねんだよ。毎日の生活だつて、大変なんだ。おまえさんがたのようなりつち者とは違うんだ」

「では、あなたのところへ泊めてもらいましょう」

「そうしましょう」

妹も僕に賛成した。

村人に有無を言わせず、僕と妹はその村人の家にやつかいになることになった。

村人の名前は彦六さんといって、一人で傘を作って、生活していた。傘と言っても紙の傘で、傘を作れるのはこの村で彦六さんだけだから、雨が降るたびに他の村人が食べ物を持って、傘を買いにきたのだった。

だから、彦六さんは僕のビニールの傘を見ると、すぐにばらしてまった。まあ、これはこれで彦六さんには彦六さんなりの生活があるのだから、仕方がないなと僕は思った。

今夜の宿も決まった僕は妹を連れて、村を見物することにした。なるほど、彦六さんのいう通り、面白いものは何にもなかった。古い民家と田畑だけ。温泉でもあればと期待したのだけれど、ぼちやん湖と呼ばれる池に近いような湖があるだけ。このぼちやん湖の名前の由来は昔、坊さんが穴の開いた船で湖へ釣りに行き、溺れて死んだため、坊さんと船から水に落ちるぼちやんという音をかけて、ぼちやん湖と呼ばれたということである。ところで、この村の人は風呂はどうしているのかと聞いてみると、井戸水を汲み上げ、それをドラムカ

ンに入れて、カンの下から薪をくべて、火を炊く。そして、あつたまつたところで、下駄を履いてカンの湯につかるといふものだった。要するに五衛門風呂のようなものだった。

僕も妹も経験がないので、そのドラムカン風呂は楽しみだった。

それから、僕は眠いのも忘れて、村人たちと話をした。人口が1000人という事なので、村人に会うたびに妹と数を数えていった。

そうして、その夜、僕たちは彦六さんの家で食事を御馳走になった。食事といつても、山芋と林檎だけという貧しいものだったけれど、それぞれ6個ずつあつたので、腹だけはいっぱいになった。

その後、僕たちは風呂に入れてもらった。

僕が先に裸になって、ドラムカンに入った。今まで立ったまま、風呂に入った経験がなかったので、妙な感じだったが、全身に一度に伝わってくる温かさは中々良かった。

「おまえさん、なにしに来たのかね」

彦六さんが薪をくべながら聞いた。

「遊びにです」

僕はしごく当然のように答えた。

「やっぱりおまえさんはリッチだね」

「でも、僕には両親がいないのです。帰る家もないし、お金も三桁しかないのです」

「およ？」

彦六さんはちよつと意外といった顔をした。

「では、おまえさんは放浪の旅をしているのだね」

「そうなんです」

「そいつは不遇だね」

「はい、不遇です」

「だったら、この村で暮らすかい？」

「そんなことをしたら、彦六さんはベリイプアーになってしまいます。それに妹は世間知らずで働けないのです」

「そうか」

「でも、僕は妹と励まし合って生きてるので、大丈夫です」

「大丈夫です」

妹も賛同して言った。

「仲のいい兄妹だな。せいぜい、しつかりやれよ」

彦六さんは涙ぐんで、言った。案外、情にもろいのかも知れない。

「彦六さん？」

妹が尋ねた。

「何だ？」

「お兄様と一緒に入っていいですか」

「そんなことしたら、湯がなくなっちゃうよ」

「いいんです。ね、お兄様」

「そだね」

僕は否定しなかった。

「あんたら、やつぱり変わってるな」

彦六さんは呆れた様子で言った。

彦六さんの家で一晩泊まり、翌朝、僕たちは出発した。彦六さんは林檎をお土産にくれ、来年もまた来いよ、と喋ってくれた。冬になると道が雪で断たれてしまうのである。僕はまた来るといふ約束をして村を出た。

しかし、その後、僕も妹もあの村へ訪れることはなかった。翌年、N村はダムになってしまったのである。

人形

東京のB町にアパートを借りた僕は、翌日から近くのカメラ部品工場で日雇いの仕事をするようになった。

就職も久し振りだが、一定の場所に住むのも久し振りだった。これも一重にアパートから就職の面倒をすべてみてくれた友人、中野剛一のおかげだった。

居住して一週間ばかりたった日曜日。その夜の夕食でのこと。

「お兄様」

妹の美代がお椀と箸をテーブルに置いて、僕を見た。

「ん？」

僕は飯を食べるのを止めて、井から顔を上げた。

「お兄様、お願いがあるので」

「何でしょう？」

「美代は明日、外へ出掛けたいのです」

「いいよ」

「でも、ひよつとしたら、明後日も明明後日も出掛けるかもしれないのです」

「いいよ」

「本当に？」

美代は念を押すように言った。

「おう、男に二言は無い」

「訳を聞かなくいいいの？」

「聞いてほしいなら話せばいいし、話したくなければ黙ってればいい。美代は美代の考えで行動すればいいだろう」

「ありがとう、お兄様。けど、隠しごとはしたくないので、美代は話します」

「うん、話すといい」

「実は美代は明日、人形を探しにいきたいのです。それは青い目で金髪で、肌の白い外人の女の子の人形なのです」

「そんな人形、美代は持っていたっけ？」

「いいえ。近所の河本由紀ちゃんがなくして困っているので、探してあげる約束をしたのです」

「由紀ちゃんと言うのは確か小学1年生の明るい女の子だったね。由紀ちゃんは美代の友達なのだね」

「はい、年は7つ違うけど、美代にとつては大切な友達なのです」

「そうか。じゃあ、頑張つて探すといい」

「はい、お兄様」

美代はにっこりと微笑んだ。

その翌日からは美代は本格的に人形探しを始めたようだった。

早朝、僕の朝食を用意して、僕がまだ目覚める前に出発する。

そして、帰りも僕の仕事の帰りより遅かった。

僕は妹がこんなに夢中になっているのを初めて見た。これまで、世間知らずで一人では何も出来ないと思つていたのに、朝早くから夜遅くまで人形を探している。きつと、妹の友達と言うのは妹にとって本当に大切な友達なのだろう。だから、友達を喜ばせたいがためにこんなに一生懸命なのだろう。僕は妹のそんな優しい気持ちがいじらしかつた。

できれば、妹を手伝いたい。でも、妹にとつてこの人形探しは自分の人生を見つげるため、いや自分の存在を確立するための戦いなのだ。妹が人形を見つ

けた時、初めて人に対してその存在を認められる。妹もそれによろやく気付いたに違いない。

僕はそう考え、妹の人形探しには口を出さなかった。ただ、食事だけはきちんととるように僅かなお金を渡すだけだった。

それから、四日が過ぎた。妹は相変わらずの生活を続けていた。

「美代、少しは休んだらどうだ」

僕は夜の10時にアパートに戻った妹の顔があまりに疲れているので、つい声をかけた。

「お兄様、大丈夫です。それより、いつも掃除や洗濯、夕食も作れなくて……ほんとにごめんなさい」

美代は小さな声で謝った。

「馬鹿。そんなこと気にしないでいい。どうせ今日もろくに飯を食べてないんだらう。夕食、作ったから食べるといい」

「ありがとう、お兄様。美代はほんとに不義の者ですな」

美代は泣きそうな顔で言った。

「いいから、早く食べる」

その夜は妹は夕食を食べると、とりつかれたようにぐっすり寝入ってしまった。

しかし、翌朝になると、またしても妹の姿は無かった。

僕は妹を心配しながらも、やはり見守るしかなかった。しかし、妹の顔色は日に日に血色が悪くなり、寢れていった。そうして、2週間が過ぎた。

「お兄様、お兄様」

ある日曜日の午後、僕が隣の人から貰った古新聞を読んでいると、妹が珍しく明るい顔をして、部屋に駆け込んできた。

「美代、どうした？」

僕は息を大きく弾ませている妹を見て、言った。

「人形が見つかったの！！」

妹は幼子のような甲高い声を上げ、後ろでに隠した物を僕の前に差し出した。

「人形……見つかったのか」

僕は驚いた顔で、青い目の、金髪の、白い肌の、女の子の人形を見た。

「〇町の廃品処理場のおじさんが持ってたの。もったいないから、捨てずにとつといたんだつたつて」

妹は興奮気味に言った。妹は顔色は決してよくなかったが、心の底から込み上げる喜びがそれを吹き飛ばしていた。

「そうか、よかったな」

「うん」

「ようし、今日はお祝いだ。久し振りに食べにいこう」

「やったあ」

妹は喜んだ。僕は妹の笑顔がこれほど素敵だと思った時はなかった。

翌朝、僕が起きた時、妹はまだ寝ていた。これもまた久し振りのことだった。

僕は機嫌よく工場へ出掛けた。

ところが、その夜のことだった。

工場の帰り、アパートを見ると、僕の部屋の明かりがついていない。妹は留守なのか。

しかし、僕の部屋のドアの鍵はかかってはいなかった。部屋に入り、電気をつけた。

「美代……」

僕は部屋の隅でうずくまっている妹を見て、驚いた。

「何やってんだ、ここで」

「……」

妹は答えなかった。

妹の傍らにはあの女の子の人形が置かれていた。

「返しにいかなかったのか」

「……」

妹は黙っている。

「美代、人に理解してほしいかったら、自分で話さなくちや駄目だろう」

僕は妹の前に腰を下ろした。

「由紀ちゃん、いらんないって」

「？」

「人形、いらんないんだって。もう新しいの買ったから、もう古いのはいらんないんだって」

妹は重い口調で言った。

「そうか、それで美代はどう思った。悔しかった？悲しかった？」

「——わからないんです。ただ胸が苦しくて、とつても涙が出てきて」

僕は妹の言葉を聞きながら、人形を取り上げた。よく見ると、服もぼろぼろで、顔の辺りも汚れている。

「それで、どうする？」

「……わからない」

妹はか細い声で言った。

「それなら、わかるまで考えればいい。もう人形は逃げることはないからね」
その夜は結局、それ以上、妹と話をすることはなかった。

妹はその後、この問題の結論を出すことはなかった。だから、今でも青い目の人形は部屋の隅でじつと座っている。

その人形は僕が部屋に帰ると、毎日、服が変わって、化粧をしているので、とても面白かった。

乞食

とある日の夜のことだった。

夕食の後、妹が珍しく僕の肩を揉んでくれた。

「どうした、何か欲しいものでもあるのか」

僕は妹の考えを先に読んで、尋ねてみた。妹は世間知らずなので、割とその行動で何を考えているか分かるのである。

「じ、実はそうなんです」

妹は自分の考えを見透かされたことにやや顔を当惑させた。

「言ってみな。僕にできることならやってあげよう」

「お金を少し頂きたいのです」

妹は僕の肩をその細い手でゆっくりと揉みながら、言った。

「いいけど、何に使うの？」

「それは――」

妹はやや言葉に間を置き「ある人に恵んであげたいのです」といった。

「そうか……それはどのような人なのかね」

「S公園のベンチに住んでいる男の方なのです」

「その男と言うのは乞食かね？」

「さあ、でも、その男の方は不遇なのです。毎日、ほとんど食することなくベンチの上にぐったりと横になっておられて、しかも、近所の子供たちに物を投げられて苛められているのです」

「そいつは気の毒だね」

「かわいそうに思って、食べ物を持っていったのですけど、食べていただけないのです」

「話はしたのだね」

「いいえ。美代が幾ら話しかけても、全く答えてくれないのです。しつこくすると、犬のような唸り声を上げて、私を追い払おうとするのです」

「その男はきつと人間不信に陥っているのだろう」

「美代もそう思います。それだけに、何とかしてあげたいのです」

「しかし、食べ物を受け取らないのなら、お金も受け取らないだろう」

「けど、美代にはどうしてよいのか分からないのです」

「わかった。では、これからその男に会いにいつてみようではないか」

かくして、時は夜の十時という時間帯だったが、僕は美代を連れて、わずかながらの野菜とお金を持ってS公園に行くことにした。

最近はずつそうなので、夜半に道を歩く者はたいそう少ない。実際、昼間でも夜でも事故に遭う時は合うのだから、それほど気にすることは無いと思うのだが、人間というものはやはり全てのものが見えていないと嫌な性格なのだろ
う。

公園に着いた。ベンチはどこかと探すほどの広さでもなく、すぐにベンチは僕の視界に入った。

なるほど、確かにベンチに横になった黒い影がある。

「あの男かね」

僕はベンチを指差した。

「はい」

妹ははつきりと返事をした。

「ここで待っていなさい」

僕は妹を公園の入口に待たせて、ベンチの方へ歩いていった。近づくに連れ、確かに男がベンチで寝ているのが分かる。

暗がりではあるが、男の服装はかなり汚かった。それは男の体から出ている異様な臭いのせいもあつたかもしれないが、しかし、昔は作業服であつたらしいその服はぼろぼろで、しわしわになつて居るのだけはわかつた。靴も一応は革靴なのだが、踵が擦り減つて、見る影も無い。さらに男の髪はぼさぼさで雑草のように伸びほうだい伸びていて、顔も髭で埋まつていて、肌の色が容易に区別しがたい。

「きみ、きみ」

僕は小さな声で声をかけた。

こういう時は突然、暴れて襲いかかつてきたらどうしようなどと思うのだが、僕の場合は少し違う。こういった乞食や浮浪者などはろくな物を食べていないので、まともに戦えば体力のある僕に叶うはずがないのだ。

「きみ、きみ」

今度は少し強い口調で言い、彼の体を手で揺さぶつてみた。

「うっ……」

男の体がぴくつと動いた。

「眠っている所を申し訳ないのだが、僕は君に話があるのだ。時間を貰えないだろうか」

僕の言葉に男はしばらく何の反応も示さなかった。

しかし、僕は黙って男を見ていた。

「おまえは？」

ようやく男が口を開いた。

「僕は近所のアパートに住む者だ。昼間、僕の妹が食べ物を届けたのに君は拒否をしたそうだね。もし食べ物が気に入らないのなら、僕が君の不遇な環境に同情して、お金を恵もうと思うのだが、どうだろうか」

「いらねえ……」

男は呟きに近い声で言った。

「そうか。すると、君は乞食ではないのだね。では、どうして君はこのような場所でじつと寝ているのだろうか。お腹もすいただろうに」

「……」

男は答えなかった。

「君にもいろいろ話せない事情があるのだね。では、こうしよう。これから僕と君は友人になろうじゃないか」

「……」

「僕は食料とお金を持ってきた。僕はこれを友人として君に貸そう。期限はいつでもいいよ。せっかく、この世に生を受けたんだ。腹が減って死んだのかっこわるいだろう。どうせ死ぬなら、かっこよく。そうじゃあ、ないかね」
僕はお金と野菜をベンチの下に置いた。

「……」

男は何も言わなかった。ただ、その時、僕を見た男の眼が不思議と優しかった。

「それじゃあ、おやすみなさい」

僕はそういつて、その場を去った。

翌朝、僕と妹が公園に来た時、あの男はまだベンチに横たわっていた。しかし、既に冷たくなっていて、二度と口を開くことも無かった。ベンチの下には一口かじった跡があるトマトが転がっていた。

後から聞いた話では、彼は朝鮮から来た兵士だったという。彼は最後まで人

間としての誇りを忘れずに生きてかっただろう。遠い国から家族の期待を背負ってやってきた以上、一兵士として、例えいかなる境遇に陥ろうとも、敵の施しは受けない。彼にはそんな思いがあっただのかもしれない。

しかし、友情には国境はない。彼はそう信じたからこそ、最後の力を振り絞ってトマトを食べてくれたのだと僕は思った。

鉛筆

その鉛筆は折られるのを待っていたかのようにテーブルの上に転がっていた。馬鹿な鉛筆だ。これほど怒っている僕の前に姿を現すとは。しかも、むかつくことにこの鉛筆は彼女のくれた鉛筆だった。仮にも今日、僕はその彼女にふられたのだ。

「あなたがつつまんない人ね」

これが彼女の別れの言葉だった。

僕は怒りにまかせて、鉛筆の両端を持つと、えいとばかりに折ってしまった。ポキン。

という情けない音がした。

天地がひっくり返り返りそうな怒りと悲しみだったにも関わらず、たったこれだけで終わってしまった。気持ちはまだ晴れないけれど、彼女がくれた鉛筆という犠牲を払った以上、怒りは否応なしに終わらさなければならなかった。

「失恋なんて恋愛にはつきものさ」

などと呟いてみたものの、誰も聞いていないのでは空しいばかりだった。

後になって、僕はこの鉛筆を折ってしまったことを非常に後悔した。いくら失恋に心が動揺していたからとは言え、彼女のくれた唯一の思い出の品を折ってしまったのだ。HBの◇◆△鉛筆。僕が学校で鉛筆を忘れた時に彼女が親切にくれたのだ。正確に言えば、貸してくれたのだが、僕はそのまま返さなかった。

かわいそうに。

机の上のまっぷたつに折れた鉛筆を見て、僕は思った。折った張本人は僕なのだが、今は誰かに折られたような気分だった。

鉛筆からは血が……じやなかった、粉がこぼれていた。

考えてみれば、鉛筆に罪はなかったのだ。鉛筆は人に迷惑をかけたわけでもなく、まして邪魔をしたわけでもない。鉛筆はただ置いてあっただけなのだ。どうしよう。

僕はとんでもない罪を犯してしまった。無差別殺筆だ。裁判にでもなれば、きつと死刑を宣告されるだろう。それほど、僕は人道に外れたことをやってし

まったのだ。

ただ自分の失恋の腹いせのためだけに鉛筆は無惨な最後をたどったのだ。
鉛筆君、許してくれ。

僕は鉛筆の前に手をつけて謝った。だが、鉛筆は答ええない。きつと恨んでいるのだろう。下手をすると、今夜あたり、僕の枕元に化けて出るかも知れない。うーん、困った。そうだ、病院に連れて行けば、まだ助かるかも知れない。

僕はハンカチで鉛筆をくるむと、急いで医者の子息の家を訪ねた。医者の子は度の強い眼鏡をかけ、坊ちゃん刈のなかなか賢い奴だ。

医者の子息はハンカチの上の鉛筆に聴診器を当てながら、うんうんとうなずいて、

「こいつは複雑骨折だよ。ほぼ即死だね」

といった。

ゲゲツ、どうしよう

「治る見込みはないのかい」

「接着剤やセロテープを使う手もあるが、そんなことをすれば、この鉛筆は生涯、世間から偏見の眼差しでみられることになる。そんな残酷なことが君に

できる？」

ああ、僕は何という愚かな過ちを犯してしまったのか。一時の感情のために、輝かしい鉛筆の将来を踏みにじってしまったのだ。

「僕はどうしたらいいんだ」

「鉛筆を手厚く葬つてやりなさい。それが鉛筆に対するせめてもの供養です」といったのはたまたま医者の子の家へ遊びにきた近所の坊主の息子であった。

坊主の息子はやはり頭も坊主頭で、眉毛が必要以上に濃いのが特徴であった。

「わかつたよ」

とにかく、鉛筆のためになることなら何でもやるつもりでいた僕は坊主の息子の言うとおりにした。

まず、通夜を行うために縁者の方々においてねがった。場所は無論僕の家。喪主は僕である。縁者には三菱鉛筆さん、ペンテル鉛筆さん、ユニ鉛筆さん、五才の妹に参列してもらった。通夜の日にはとうとう彼女は来なかった。焼香に訪れたのは坊主の息子と医者の子だけである。

翌日、坊主の息子の読経の後、鉛筆はガスコンロで焼かれた。残った灰を坊

主の息子と二人で箸でとつて、骨壺に納めた。その際、坊主の息子が鉛筆に「ピロリン次郎信士」というよくわからない戒名をつけてくれた。その日も連絡したにも関わらず、彼女は来なかった。

四十九日の法要の後、鉛筆の遺骨は庭の花壇のそばに埋められた。墓はプラスチックを使って、立派なものを作つてやった。

僕は毎日のように鉛筆の墓の前で手を合わせた。そんな僕を両親は変な目でみていたが、僕は全く気にしなかった。

半年が過ぎた。僕はめげずに鉛筆の墓の前でお参りを続けていた。そんなある朝、学校へ行った時、教室で僕は筆箱を忘れたことに気づいた。しまった。今日は図工の授業があるのに……

僕は思いつきり困つてしまった。友人に鉛筆を貸してくれるよう頼んだが、どうも友達がいがなく、坊主の息子まで

「鉛筆は私の命だ。その命を渡すわけには行かない」などと、とんでもないことをぬかす始末。一時間目の図工の時間は着々と迫

つていた。

「〇くん、どうかしたの？」

教室の前の廊下であたふたとしている僕に誰かが声をかけた。振り向くと彼女だった。

「え、鉛筆、忘れちゃったんだ」

僕は照れくさそうに言った。

「じゃあ、貸してあげるよ。私、たくさん持ってきたから」

彼女は絵の工具箱から鉛筆を二本と消しゴム一個を僕に差し出した。

「ありがとう」

僕は複雑な表情で受け取った。

「あつ、ほら、もう時間よ。〇くんも急いでね」

彼女は笑顔で言うと、図工室へ慌てて駆けていった。

僕は手の平の二本の鉛筆を見た。それは◇◆△鉛筆だった。

鉛筆君、彼女が笑ってくれたよ……

「〇！何してるんだ。早く図工室へ行け」

担任が僕を見て、怒鳴った。

でも、今の僕には耳に入らなかつた。

道

僕は住宅街の一軒家に住んでる夫婦の長男なのだ。僕は一人っ子で、甘えられるので、とつても幸せなのだ。

僕の名前は太郎と言うけれど、他人は僕をガキと呼ぶのだ。とつても失礼なのだ。

僕は今、とつても不満なことがあるのだ。それは僕の家の前道のことなのだ。その道は昼間でも薄暗いから、夜になると真つ暗になるのだ。人と擦れ違つても、どこの誰だか全然わからない。

けど、そのくらいなら別にどうでもいいのだ。相手の顔がわからなければ、挨拶しないで済むから。

僕が気に入らないのは、自転車なのだ。最近の自転車乗りは夜でもライトをつけないのだ。それはとつてもいけないことなのに、ポリ公は取り締まってくれない。野放し状態。おかげで自転車乗りはいい気になって、ライトを付けな

いまま平気で夜道を走っている。それが一台なら僕は許す。しかし、その数は十台や二十台ではきかないのだ。この間など、僕は風呂帰りにアイスクリームを食べながら歩いている時に、後ろから自転車に衝突され、顔面、クリームになつてしまったのだ。僕は何もしてないのに、こんな横暴が許されていいのだろうか。いいや、許せん。

これから、僕は担任の高木矢三郎が言った「攻撃は最大の防御」という言葉通り、逆襲に出るのだ。

その作戦こそは「道の真ん中漬物石作戦」なのだ。要するに適当な道の真ん中に夜だけ漬物石を置くのだ。ただそれだけ。しかし、この作戦に僕は自信があるのだ。というのも、ライトを付けない自転車乗りは馬鹿なのだ。だから、この程度で十分ひつかかる。

さつそく、一回目を実行したのだ。

おかんに黙って持ってきた漬物石を家から離れた道の真ん中へ置く。

翌日、案の定、自転車が石に躓いて、こけよつたという噂が流れてきた。ざまあみさらせだわさ。

僕はこれに味をしめ、今度は石の置いてある道を見張ることにした。深夜、

こつそり家を抜け出し、道に石を置く。

酔っぱらいの乗る自転車ライトをつけないうまま、さつそくやってきよった。結果は石につまづいて、横転。酔っぱらいは目の前の石に当たり散らしながら、よろよろと自転車に乗って、去っていきよった。

結局、その夜は三人の自転車乗りがひっかかった。僕は自転車のずっこける様子が面白くてたまらなかつたのだ。何度見ても笑える。これは下手な遊びよりやみつきになるのだ。

それからというもの、僕は見張りはしなかつたが、石を毎夜、置き続けた。そして、翌日の自転車乗りの失態を噂で聞くのが、楽しみになったのだ。使命感よりも遊びになってしまった。まあ、これで自転車乗りもきちつと自転車にライトをつけるだろう、と僕は思ったのだ。

ところが、十日ほどして石が道の真ん中からなくなるようになったのだ。僕が朝になって取り取りにいくと、いつも石がなくなっているのだ。僕はめげずに五日ばかり石を置き続けた。しかし、石も意地になってなくなっている。

僕はおかしいと思つたのだ。それで、また見張ることにした。

そうすると、午前零時頃に娘がやって来て、石を両手に抱えて持つていつて

しまった。娘は小学生で、僕と同じくらいだったのだ。

僕は跡をつけ、つい途中で声をかけてしまったのだ。

「君はどうして石を持っているんだ」

娘はこんな夜分に小学生に声をかけられて、妙な気分だったに違いない。でも、娘は驚く様子は全くなかったのだ。

「わたしは道の真ん中にあつた石をどかしているの」

「なぜに、君が？」

「暗い道にこんな石があつたら、危ないから」

「でも、転ぶのは自転車にライトをつけない輩だけだ。そんなやつらのことは心配する必要ねえと思うけど」

「父は帰り道にこの石でつまずいて、頭を打って、働けなくなってしまったの」

「君の父は自転車じゃなかったのか？」

「父は歩いていて転んだの。酒によつてもいかなかったし、目が悪いわけでもなかったの」

「どうやら娘は僕が石を置いた犯人と見抜いているようだった。でも、なぜか娘はそれを咎める様子はない。」

「それで、石をどかしているのか」

「そう。これ以上、不幸を増やしたくないから」

娘の目は悲しみに満ちていた。僕はすごく気が咎めたのだった。僕は何の罪もない家庭を踏みにじってしまったのだ。

「君……実はこの石を置いたのは僕なんだ」

僕は正直に娘に告白した。

「そう」

娘は素っ気ない返事だった。

「怒らないの？憎まないの？」

僕は不思議でならなかった。

「もう終わったことだもの。それに、あなたにはあなたの考えがあるし、わたしにはわたしの考えがある。だから、別に咎める気はないの」

僕は娘の気持ち理解できない。

「明日は来なくてもいいよ。もう置かないから」

「ふうん」

娘は顔色一つ変えなかった。

「ほんとにごめん。僕は一生かかってもつぐないきれないよ」

「償う気があるなら、父の見舞いにきて。深山病院の505号室。緑川を訪ねるといいわ」

「君の名前は？」

「明日香よ」

「いい名前だね」

「あなたは？」

「石川太郎」

「そう。さようなら」

娘は石を抱えて、そのまま帰っていった。

僕は何だか明日香という子に恋した感じだったのだ。

一週間後、悩みに悩んで、僕は緑川氏の入院先の病院へ訪ねたのだった。緑川氏は頭を打ったショックで、下半身が動かなくなったという事だった。

緑川氏は明日香と性格が似ていて、僕が白状したのに、怒りもせず、気にすることはないと僕を励ましてくれた。

「君は君の使命感でやったんだ。それでよろしかろう」

「でもー」

「失敗は恐れちゃ、駄目だ」

「はあ」

僕は何とも面食らうばかりだったのだ。

「ところで、明日香さんのことを聞きたいんですけど」

僕は一番聞きたいことを尋ねたのだ。

「娘は死んだよ」

緑川氏は普通に言った。

「え？」

僕は目を丸くした。

「三日前に夜道で自転車と衝突してね。その時に頭を地面に強く打ってしまっ
たんだ」

「そんなー」

僕は茫然としてしまったのだ。あの子が死んでしまった。僕の心に大きな穴
が開いてしまったのだ。

「人生なんてそんなものだよ、太郎君。ひよつとして僕が君の置いた石に転ば

なかつたら、僕は自転車か何かと衝突して死んでいたかも知れないんだからね。だから、太郎君、君は君の考えで動きたまえ。振り返る必要はない」

その夜から僕はまた決心したのだ。また夜道に石を置き続ける。これがいいことか悪いことかなんてわからない。ただやりたいからやるのだ。今度は遊びではなく、使命感だった。

占いおかみ

いきなり切り出すのも何だが、僕は二三日前からどうも歯痛に悩まされている。

僕はこれでも英会話教材のセールスマンで、実績だつてそれほど悪くなく、上司にも社長賞をもらったことがあるくらいなのだ。

そんな僕だが、この歯痛のせいでも、どうもセールスが思うように行かない。普段は無意識に出るニツコリスマイルがどうも出来ない。特に訪問先の主婦の前にすると、どういうわけか奥歯がズキズキと痛みだし、苦虫をつぶしたような顔になってしまう。

これでは相手が教材を買うどころか、話も聞いてくれやしない。そこで仕方なく僕は金曜日に休暇をもらつて、歯医者に行くことにした。

歯医者なんてものは、どこでも同じだと思つて、一番近い「上下歯科」を訪ねた。ちなみに「上下」は「じょうげ」と読むのではなく、「かみしも」と読

む。

それはともかく、普段はよく道で目にするこの小さな歯科医院も実際に訪ねるのは初めてだった。

医院に入ると、運よく僕は一番の患者だった。受付で順番待ちの名前を書くわけでもなく、保険証を出し、初診だと言うだけでよかった。

僕はすぐに診察室へ通された。中は懐かしき治療器具の数々。子供の頃はよく泣かされたものだった。

「どうぞここへ」

銀縁の丸い眼鏡をかけ、頬の膨れた中年の医者、僕に席を勧めた。

僕は治療椅子に座った。

「どこがお悪いのですかな」

「どうも右の奥歯が痛むのです」

「わかりました。とりあえず、うがいを」

僕はコップの水でガラガラとやって、たん壺に吐き出した。

「では、拝見しましょう。さあ、口を開けて」

医者の言葉に僕はあーんと口を開けた。

医者はデンタルライトを付けると、さつそく探針と歯鏡で僕の口の中を搔き分けた。

「ははあ、なるほどね」

医者ほうなずいた。「こいつはひどいな」

医者はしばらくぶつぶつと呟きながら、診察していた。

そして、そろそろ僕の口に唾液が溜まってきたかなというところで、診察を止めた。

「では、うがいを」

そこでまたうがいをする。

「やつぱり虫歯ですか」

「いやいや」

歯医者は大きく横に首を振った。「そんな生易しいものではありません」

「といたしますと」

「いいですか、これは大変なことですよ」

医者は深刻な顔つきで言った。

「だから、何なんです」

「非常に深刻極まりない事態です」

「それは何ですか」

「ですから、大変だと」

「早く言つてくださいよ」

僕はじれったくなつた。

「では、申します。実は――」

医者は一瞬、呼吸置き「あなたの第二大臼歯には悪霊がとりついています」

「え？」

僕は一瞬、耳を疑つた。「今、何と？」

「あなたの歯には悪霊がとりついています」

医者は真顔で言つた。

「馬鹿馬鹿しい。何を言うのかと思えば。あんた、医者のかせにそんな非科学的なことを」

「事実を述べているのです」

「僕を馬鹿にしてるのか」

さすがに僕も腹がたつた。

「いいえ。これは一刻を争います。私がいい占師を紹介しましょう。住所はここに書いてあります」

かくして僕は占師を訪ねることになった。

なぜかって？

それは僕が聞きたいくらいだ。

あの医者のお話を聞いた後、急に眠くなって、寝てしまったのだ。そして、起きてみたら、よくわからないが、「左右占い鑑定所」なる店の前によこになっていた。

おそらく、診察中に麻酔か何かをされたんだろう。全くいまいましい医者だ。後で警察へ訴えてやろう。

とはいえ、あんな藪医者のお話など信じる気もないが、目の前にその占い屋がある以上、行ってみようという気になったのである。

僕は店に入った。中は外からの光りでも奥が見えないほど、真っ暗だった。「ドアをおしめなされ」

闇の奥から女の声が出た。

僕は扉を閉めた。

中は完全に闇となった。別に神秘的な雰囲気というよりは、物置小屋に入っているような感じだった。

「奥へどうぞ」

また女の声。

僕が何歩か歩いていると、突然目の前に悪魔のような顔が浮かび上がった。

「ぎよえええ」

僕は思わず悲鳴を上げた。

「驚くことはありません。占師でございます」

よくみると、中年の女が懐中電灯の光りを下から顔に当てているのである。

「びつくりするじゃないか」

「それは、それは。では、こちらへどうぞ」

女は気にする様子もなく、さっさと奥へ行く。僕も後に従った。

女が引き戸を開けると、テーブルの上に蠟燭が一本だけ灯された狭い部屋があった。

「そちらへおかけを」

女はテーブルの向かい側の椅子を僕に勧めた。

僕が椅子に座ると、女も反対側の椅子に腰掛けた。

「よくいらっしやいました。私が占師の左右トメです」

女占師は妙に低く重たい声で自己紹介した。

「では、さっそく御用件を伺いましょう」

「僕は来たてきたんじやないのですが、実は——」

「わかっております」

占師は僕の言葉を制した。「齒のことで来たのでございましょう」

「知ってるなら、聞くなよ」

「いえいえ、これは私の霊能力によるものでございます」

「あ、そう。じゃあ、——」

「齒にとりついた悪霊を追い払ってほしいのですね」

また占師が口を出した。

「そうだよ」

「では、占って差し上げましょう」

占師はトランプを懐から取り出し、早速テーブルに並べ始めた。タロット占いででもやる気なのだろうか。

僕には詳しいことはわからないが、とにかく真ん中にカードの山を置き、その四方に四枚ずつ時計回りに配っている。どうやらタロット占いではなさそうだ。

「これはそなたの運命を写し出します。それではめくってみせよう」

占師は山の四方のカードの一枚目をそれぞれ捲った。僕から見ると上のカードがスペードの2。下がスペードの7。左がスペードのA。右がスペードの3だった。

「おお、何と不吉。上と下を足すと9。即ち「苦」。右と左を足すと4。即ち「死」。全部を足すと13。しかも、今日は金曜日。何と言うことだ」

占師は驚いた。

「それで僕はどうなるんですか」

「安心めされよ。次は星占いと血液型占いじゃ」

「はあ」

「そなたの生年月日と血液型を言うがよい」

「昭和**年六月三日。血液型はBです」

「わかった。では、しばし待つがよい」

女は両手を合わせ、瞑想に入った。「今、星の神々と交信する」

女はしばらく目をつぶり、念仏のようなものを唱えていた。

僕は待つてる間、天井を眺めていた。

「どりゃあああ」

女は気合を入れて、目を開けた。「お告げがあつたぞ」

「それでどんなお告げで？」

「そなたはマスコミ関係に就職するのがよいとでておる」

「は？」

僕は啞然とした。

「性格はクールで、お天気屋なところがあるがー」

「んなこと、誰もきいとらん！！」

僕はテーブルをどんと叩いた。

「これは失礼した。では、真面目に」

「今までは真面目じゃなかったのか」

「いやいや、そうではない。次はあなたの守護霊を呼びましょう」

呼んでどうするんだと聞こうと思ったが、やめた。

女は机の上に紙を置き、「ストレス」だとか、「病気」だとかいった単語を紙一杯に書いた。

「守護霊があなたの歯痛の原因をお教えめさるぞ」

女はそういったが、僕は何か嫌な予感がした。

「では、始める。ええい」

女は気合を入れて、紙の上に硬貨を置いた。そして、その硬貨の上に親指を乗せ、「ゴックリさ……」

「やめんか！」

僕は机の紙をとっぱらった。

「何と、そなたはお告げを聞きたくないのか」

「俺は帰るぞ」

僕は冷やかに言った。

女は僕の態度にまずいと思ったのか、

「いやいや、待ってください。今度は本当に本当です」

「じゃあ、今までは嘘だったのか」

僕は完全に馬鹿にされているんじゃないかと思いはじめていた。

「そなたは百円をお持ちかな」

「持つてるよ」

僕は百円をポケットから出した。

「では、この箱の中に入れるがよい」

と、女が机の下から持ち出したのは、ダイヤルと硬貨を入れる穴のある

四角い箱であった。それは明らかにおみくじだった。

「次にいこう」

僕は低い声で言った。

「そ、そうか。じゃあ、最後に手相を……」

「あのなあ、俺は歯を治してもらいたいんだ。原因が知りたいんじゃない」

僕は机を強く叩いた。

「何だ、そうであったのか。だったら、私が調合した秘薬を差し上げよう。こ

れはあらゆる悪霊を追っ払う特效薬だ」

女はそういって、懐から薬瓶を取り出し、僕に渡した。

「これは？」

「新根治水じゃ」

女は言った。

僕は黙って、立ち上がった。

そして、薬瓶をぎゅっと握りしめながら、出口のドアへ行った。

「待ちなされ、そっちは出口ではない」

女は止めたが、僕は無視してそのドアを開けた。

パーツと明るい光りが僕の目を覆った。

少しして、目が治ると、そこにはあの中年の歯科医が立っていた。歯科医は

満面の笑顔でこういった。

「妻の占いはいかがでしたか」

こうして、僕の実に不愉快な休日は終わった。

あの後、歯医者では治療をしてくれた。それに関しては何もない。あの男も妻の占い業が振るわないのに同情して、自分の客を妻の方に回したのだろう。

それはわかる。

だが、だが、だがだ。その後、歯が治ったにも係わらず、あの占師との一件を思い出すたびに僕の奥歯はズキズキと痛むのである。

松

カラツと晴天にめぐまれたある日曜の午後、島野敬子は東京郊外の友人の久野浅子の家に訪れた。

「浅子、浅子」

縁側でのんびりと外を眺めていた老人は大きな声で呼んだ。

「浅子、呼んでるわよ」

「いいのよ、別に。もうぼけてるんだから」

これから二人で買物に出かけようとしていただけに浅子も不愉快だったようで、老人の呼掛けを無視した。

「でも、やっぱりそれはよくないわ。私も行くからいいでしょ」

敬子がさそいかけるように言うのと浅子もやれやれといった様子でうなずく。

玄関の廊下を通って、居間を抜けると縁側である。

老人は板敷に腰掛けていた。老人は二人を見ると顔をしわくちやにして笑い、

「おお、よく来たね。そちらさまは浅子の友達かな」と言った。

「こんにちは、島野敬子と言います」

「元気そうな子じゃ。浅子はいい友達を持つてるのう。まあ、そこへ座りなさい」

二人が座ると、老人はお菓子の入った皿を出した。

「おじいちゃん、何か用？」

浅子は苛立ちげに言った。どうにも早く老人の用から解放されたいという感じである。「まあ、そう急ぐことはないじやろ。それより、浅子、あの松を見てどう思う」

老人は庭に一本だけ立っている松を見て言った。

「また、始まった。何度、聞いても同じよ。あんな醜い松、大嫌い！」

浅子が感情を込めて言った。

「ちよつと浅子、言い過ぎよ」

敬子は浅子の脇を肘でつついてささやいたが、浅子はずんとしてそっぽを向いている。「敬子さんはどうかね」

「え？は、はあ」

敬子は老人に尋ねられ、慌てて松に目を向けた。そして、何か誉め言葉をと思つたが、あの松を見てはまるで言葉に浮かばなかつた。

それは松と呼ぶに呼べない木だった。おそらく、老人に松と最初に言われなければ、とうてい敬子にはわからなかつただろう。

葉はまるでなく、どの枝もつるのようにくねくねと曲がり、幹の色は黒ずんだ灰色であつた。もう立つているのが不思議なくらいである。

「あんたも醜いと思つているのじゃろ」

「そんなことは……」

「気にしないでもいい。そんなことで責めたりはせんよ」

「すみません……」

敬子はうなだれた。

「いいのよ。それが正常な人間の考え方よ」

浅子が口をはさんだ。

「浅子！」

「敬子は黙つて。だいたい、おじいちゃんはしつこいのよ。毎年、この時期に

なるといつもいつも松のことばかり聞いて――そして、決してあの話をするの」
浅子がヒステリックに怒鳴った。

「あの話？」

「ええ、聞いてみる、私は聞きあきたけど」

「うん」

「おじいちゃん、簡単に敬子に話してあげて」

浅子はそっけなく言った。

「ああ、いいよ。それならすぐ始めるとしようかな。そう、あれは十三年前の春のことだな……」

老人はぽつりぽつりと話し始めた。

その夜は空気が乾いていた。ここ数日間、異常気象とも思える猛暑が続いていたからかも知れない。

久野家でもこの熱帯夜のせいで部屋中の窓が網戸を掛けて、開けられていた。それというのも今日は電気工事の都合で停電だったのである。

みなが早々と寝てしまう中で久野芳夫は二階の部屋でろうそくを灯して、受験勉強に励んでいた。

かれこれ四時間。夜も最後の絶頂期を迎えている。

芳夫はようやく問題集を解き終えると、大きく机に持たれて伸びをした。緊張が抜けて、あくびがでる。

「さあて、今日はここでやめておくかな」

そう言つて、机の上の問題集とノートをたたみ、筆記用具を筆箱にしまった。そして、最後にろうそくを吹き消そうとしたときだった。

突然、網戸から吹き抜けてきた強い風がろうそくを倒したのだ。ろうそくの火はすぐ消えたが、その消える瞬間に火が本に乗り移ってしまった。

芳夫は慌てた。なんとか火を消そうとしたが、火は瞬く間に部屋に燃え広がった。

彼はもうどうすることも出来ず、部屋を飛び出すと階段を駆け降りながら、

「火事だ！」

と叫んだ。

家族はそれに気付いて、慌てて飛び起き、取るものも手に付かず、家逃げ

出す。

火はもう全体に燃え広がっていた。古い家でしかもこの乾燥した空気の中ではおそらく何も残らないだろう。

消防車を呼んだ後、久野一家はオレンジ色に燃え盛る家を肩を落として見つめていた。「みんな……ごめん、俺のせいで」

芳夫が小さな声で言った。

「なあに、家族がみんな無事なら——」

そのとき、母の多恵子が発狂したように声を上げた。

「あなた、大変！浅子がいない」

「なんだって！いついなくなっただ」

「わからないわ。逃げるのに慌てて——確かに連れて出たと思ったのに」

「それじゃあ、まだ家にいるっていうのか！」

「ああ、どうしよう。私ったら……」

多恵子は頭をかかえ、嘆いた。

「おまえは娘の命よりも自分が大事なのか。俺はそんな女とは知らなかったぞ」
父の次雄は怒りをかられ、怒鳴った。しかし、多恵子はもう子を置き去りに

したショックでただごめんなさいと謝るばかり。娘の浅子はまだ三つなのだ。

「父さん、やめてよ。俺が悪いんだ。だから、助けにいくよ」

芳夫は火の中に飛び込もうとした。

「死ぬ気か。はやまるな！」

次雄が芳夫を抑えると今度は発作的に多恵子が豪火の中へ乗り込まんとする。

「誰か多恵子をとめてくれ！」

次雄が叫ぶ。

そんな時、間一髪、消防署員が駆けつけ、多恵子を救った。

「浅子！浅子」

多恵子はその場に泣き崩れ、何度も娘の名前を呼んだ。

「奥さん、この火の中で救出は無理です。後は運を天に任せましょう」

消防署員はなだめた。

数時間後、火事は家をすべて焼き払い終わった。空は青みがさし、雀が鳴き始めた。

さっそく消防署員が捜索にあたる。その中には父の次雄も加わった。

「これでは娘さんの遺骨も残りませんな……」

「……」

次雄はその場にしゃがんで砕けたがれきをあさった。しかし、どれもみんな灰となって崩れてゆく。

「おい、娘さんが見つかったぞ」

その時、次雄の耳に吉報が飛び込んだ。彼はすぐに立ち上がるとすぐ声のあつた方に向かった。

「浅子の遺体が見つかったんですか？」

「遺体？とんでもない、生きてますよ」

消防署員は微笑んだ。

目の前の松の木の下に幼い子供が巣やすやと眠っている。実にあどけない寝顔であつた。

「これだけの火事の中でこの木が崩れなかったのはまさに奇跡です。しかも、木の下に眠っている娘さんには火の粉はおろか葉一枚たりとも落としていません」

消防署員がまだ信じられないという顔つきで言った。

「奇跡……そんなものじゃない。この木は明らかに娘を救ってくれたんですよ」
次雄が頬を緩ませて、目を涙でいっぱいになると、寝ている娘を抱き上げ、ぎゅつと抱き締めた。

「パパ、いたいよお」

浅子が目をさまして、言った。

「痛いか、いいぞ。生きてる証拠だ」

次雄はそう言って、いつそう娘を強く抱き締めた。

「どうだった？」

老人の話を聞くなり、浅子は退屈した顔で敬子に聞いた。

「すばらしいじゃない」

敬子は感動して言った。「この松が浅子を守ってくれたんでしょ」

「そうよ」

浅子は強い口調で言った。「でもね、火事の時、どうして私があの松にいたか、わかる？」

「え？」

「おじいちゃんがぼけて、寝ている私を外へ放り出したからよ」

浅子は松の木を思いつき蹴った。すると松は砂のように崩れさり、風に舞って空に消えた。後には何も残らなかった。

つくえ

僕は再び戻ってきた、この学校のこの教室のこの机に。

学生時代と全く変わらないこの教室。僕はこの教室へ教師となって戻ってきた。

教室には誰もいない。今日までは春休みだ。明日から生徒たちを前にして僕は教壇の上で、弁舌をふるうことになる。

僕は教壇の上に立った。教室全体が面白いように見渡せる。六年前まで、僕はこの教壇に立つ教師に向かって、心の中で悪態をついていたのだ。それが今では……

僕は今、無性に緊張している。初めてこの学校に来た時は何の緊張もなかったのに。おかしいものだ。

けど、大勢の生徒の視線を一身に受けながら、授業をする教師と言うのは考えてみると、凄いいことだと思う。僕にそんなことができるだろうか。教育実習

の時はまだ短期間だったから、耐えられた。しかし、これからは期限がないのだ。

僕は教壇から下りて、自分の机に歩み寄った。僕の最後の席だ。

ここにいる僕と学生時代の僕とは生徒と教師の立場が逆転したという以外は、何ら変わってはいない。——いや、一つだけ

机の上にはいつぱいに落書きがしてある。別に書いたからと言ってどうなるわけでもないのだが、学生たちはなぜか心の声をこの机という壁に表現しようとする。僕もその一人だった。

机の隅に書かれた相合い傘。左には僕の名前。右には川原裕子。僕の彼女だった人の名前。——懐かしい。これを書いた時の僕の心はうきうきとしていた。高校二年の時だった。

僕はこの二か月後、彼女と小さなことで喧嘩し、そのわだかまりが解けないまま、父の急の転勤が決まった。そして、彼女に告げることなく、北海道へ引っ越していったのだった。

今頃、彼女は何をしているだろうか。会社員か、それとも結婚して主婦か。いずれにしても、彼女の人柄を考えれば、きっと幸せに暮らしているに違いな

い。

僕がこの学校へ来たのは、僕自身の選択だった。この学校で教師を募集していると言う時、僕は真先にその話に飛びついた。どうしても自分の学生時代に決着をつけたからだ。

六年もひきずって来たこの学校の苦い思い出を、楽しい思い出に作り変えたかった。

僕はきれいに並んだ机を窓側の一つ一つ見て回った。どれにも意味不明の落書きが書いてあったり、彫ってあったり。学生時代でもじっくり人の机の見たことなど一度もなかった。

時折、知っている名前が書いてあると、つい口もとが緩んでしまう。僕はいつしか落書きの色あせない新鮮さに心を奪われていた。もう何年もたっているのに、言葉が生きている。すぐそばで声が聞こえてきそうだ。

僕は子供のように夢中になって、一つ一つの机を見ていた。

川原裕子――

窓から五列目の三番目の席を通り過ぎた時、ふっとその名前を机の上で見た気がした。僕の机以外にも彼女の名前が書いてある！

僕は一つ戻って、その机の上をまじまじと見つめた。
相合い傘に僕と彼女の名前。そして、その横に

博のバカ！！

と書いてある。

「これは……」

僕は目を擦った。この字は彼女の字だ。間違いない。そういえば、僕があ
の席にいた時、彼女のこの席だった。

いつ書いたんだろう。

その時、教室の戸が静かに開いた。僕ははっとして、戸の方を見た。

「裕子……」

僕は金縛りにあったようにしばらく動けなかった。

彼女は制服を着ていないことを除けば、六年前の面影をそのまま残していた。

「きつと来ると思ってた」

彼女は僕をじつと見つめて、言った。

「……」

僕は彼女が僕に会ったら、黙って北海道へ行ったことをきつと怒ると思っていた。でも、今の彼女の顔は優しかった。

「今日、来なくても、いつかは来てくれると思ってた……」

彼女の声は涙声だった。

「お、おれは……」

僕は何を言っているのか、わからなかった。

彼女は一步、一步、僕のところへ歩いてきた。そして、僕のすぐ目の前まで来た。

「わたしも明日からここの教壇に立つの」

「？」

「もう一度、ここで、つくろ。楽しい思い出をいっぱい——」

「裕子！」

僕は彼女を思いつきり抱きしめた。今の僕には緊張感も不安もなかった。た

だ胸がはち切れんばかりの熱い思いでいっぱいだった。

ハッピーエンジェル

はあい、みなさん、コンニチハです。

あたし、天界福祉事務所からきた幸福宅配天使、メアリーですの。
今日も人間界の不幸な人たちのために幸せを配りに行くんですのよ。
頑張らなくちゃ

「ええと、ココですわね」

メアリーは空からポロアパートを見つけると、手に持った写真と見比べた。
メアリーは外見上は五才ぐらいの女の子。背中に小さな白い羽を持ち、左手
に手提げの白バック。服は白い布を頭から被っているという感じであった。

「汚いアパートですね。どんな人が住んでいるのですよ」
パタパタと羽を動かしながら、アパートの窓に近寄った。

「キヨタさん、キヨタさあーん」

メアリーは窓を叩いた。

しかし、返事がない。

「キヨタさあん」

メアリーはまた窓を叩いた。

おかしいですわね。ちゃんと在宅確認をしてきたですのに。

メアリーは仕方なく窓を動かしてみた。

うわわ、開きますわ。じゃあ、ちよつとだけ。

メアリーは窓を半分ほど開けた。

と、突然、

ガアー、ガアー、グオー

と物凄い音が聞こえてきた。

「な、何なんですか」

メアリーは目をシロクロさせた。

見ると、部屋には男が布団の上で大の字になって、大いびきをかいて寝ていたのだった。

「まあ、寝ていらしたのね」

メアリーは窓から部屋に入ると、寝ている男の枕元に降りた。

「ネエネエ、キヨタさん、起きてくださいよ。あなたはキヨタさんでございませよ」

メアリーは男を揺り動かした。しかし、男はてんで起きようとしな

「ガンコですね。仕方ありません、起床バズーカをおみまいです」

メアリーはバツクからバズーカ砲を取り出した。

「行きますわよ、後悔しても知りませんからね」

メアリーは男の顔に向けて、バズーカ砲を構えた。

「ゴオ、ヨン、サンー」

メアリーが勝手にカウントを始めていると、男がふつと目を覚ました。

「なんだ?!?!」

目の前のバズーカ砲に男は仰天した。

「イーニイ、イチ」

「誰だ、てめえは」

男はすつくと立ち上がると、メアリーからバズーカ砲を奪い取った。

「ア、アノ、アタクシですネ」

メアリーが苦笑して、説得しようとしたが、時すでに遅し。

「人ん家に勝手に入るんじゃねえ」

男はメアリーの手を掴んで、窓の外、上空へ投げつけると、手にしたバズーカを発射した。

ドーン ヒュルヒュル ピカッ ドカーン

メアリーは上空で塵となって消えた。

「――なわけないでしょ」

メアリーは逆に砲弾をバットで打ち返した。

砲弾は真っ直ぐ男の部屋の窓へ飛び込んだ。

ドーン ヒュルヒュル ピカッ ドカーン

男の部屋は塵となって消えた。

「おまえ、俺に何か恨みでもあるのか」

清田正夫はメアリーを睨み付けていった。

「アラ、あたくし、そんなこと。キヨタさんが悪いんですよ、起きないから」
「おまえは人が起きないとアパートをぶっ壊すのか」

清田はすでに廃墟と化したアパートを指さして、言った。

「心配いりませんわ」

「何で」

「アタクシ、申し遅れましたけど、天界福祉事務所の幸福宅配天使、メアリーなんです」

メアリーは名刺をさしだした。

「それで」

清田は無愛想に言った。

「今回、アナタが見事、幸福プレゼントに選ばれたんです。なんと一回だけ願いをかなえてさしあげますのよ」

「馬鹿らしい。弁償しろ」

「アラ、弁償するのがお願いですのね。イイデスワ、では」

メアリーがバツクからバトンを取り出し、魔法を掛けようとする。

「ああ、ちよつと待て」

清田はある考えが浮かんで、メアリーを止めた。

「何ですの」

メアリーは清田を見て、言った。

「おまえ、本当に俺の願いを何でもかなえてくれるのか」

「もちろんですわ、アタクシ、幸福天使ですもの」

「本当だな」

「天使はウソをつきませんわ」

「よし、決めた。願いを言うぞ」

「いいですわ」

「ようしー」

清田は願いを言おうとしたが、いざ願いといふとなかなか出てこない。

「早くしてください」

「待てよ、どうせなら三つにしてくださいよ」

「駄目ですよ」

「何だと、人の部屋、破壊したくせに」

「うつく、それは事故ですわ」

「何が事故だよ」

「わかりました、直します。それが願い事ですよ」

メアリーがバトンを振り上げる。

「わあ、待て。悪かった」

清田は引き止めた。

「判ればいいんですよ」

メアリーは偉そうなことを言った。

「全くケチだな」

清田は腕を組んで考え込んだ。

さあて、どうするかな。こいつのいうことは、はったりかどうかかわからねえが、変な羽つけて飛んでる以上、普通のガキじゃねえことは確かだ。ここは一つ、真剣に考えてみよう。

清田が呑気に考えている間にも、崩れさったアパートの前では野次馬が集まり、その中で警察や救急隊員が活動に当たっている。

「早くしてください。こう見えても、天使は忙しいんですよ」
メアリーは時計を見ながら、催促した。

「決めた」

そういつて、清田が腕を組むのをやめた。

「願ひ事は何ですか」

メアリーがメモ帳と天使の羽のペンを取り出す。

「金だ」

「お金ですか、わかりました」

メアリーがコクンとうなづいた。

やけに簡単に納得するな

「おい、ガキ」

「ガキではありません。メアリーですわ」

「金って何だかわかってんだらうな。お寺の鐘でも、工事現場の鉄クズでもな

いぞ」

「アタクシ、バカではありませんことよ。お店で買ひ物ができるといふお金でしょう」

「そうだ。しかも、硬貨じゃないぞ、福沢諭吉の一万札を最低でも一万枚以上

だ」

「いろいろうるさいですわね。それで、いいですか」

「いや、まだだ。それから、札は全て使い古しだ。出す時はちゃんとトランクに入れてくれよ。それから――」

「まだ、あるんですの」

「それだけでいい。とにかく、頼んだぞ」

「わかりました。この場で出しているんですのね」

「いや、ここじやまずい。他へ行こう」

そうして、清田はメアリーを人けのないビルの裏まで連れてきた。

「さあ、頼む」

清田は期待を込めて、言った。

「はあいの」

メアリーはバトンを振り上げ、呪文を唱えた。

「ロレイマンマチイ、ツサンエンマチイノチキユワザクフ」

メアリーが地面にえいっとバトンの先を向けると、稲妻のような光線が出て、どーんと煙が上がった。

「おお」

清田は感嘆の声を上げた。

煙が引くと、そこには三つの鉄製のトランクがあった。

清田は海に飛び込むようにそのトランクにぱつと飛びついた。

そして、子供ののように目を輝かせながら、トランクを開けた。

「うおおおお」

清田はさつきよりも一層高い声を上げた。

トランクの中には見事、ぎつしりと詰まった一万円札があったのである。

「これでいいですね」

メアリーがどうだとばかりに自慢げに言った。

「ああ、最高だよ」

清田は札束を手にして、まだ信じられないといった様子で言った。

「御満足してくれて、嬉しいですね。アタクシも天使の仕事が出来て満足ですよ。事務所の同僚がいつも言うんです。オマエはいつもドジばかりやって、人を不幸にしてるって。そんなことないですわよね」

「ああ、最高の天使だよ」

清田はすっかり札束に心酔している。

「マア、イヤですね。アタクシ、困ってしまいます。どうしようかしら。キャ

ア、はずかしい」

メアリーは一人で照れている。

プルル、プルルー

その時、メアリーのヘアバンドが点滅した。

「ああら、呼び出しですの。じゃあ、キヨタサン、アタクシ、失礼しますの」

「ああ」

清田はまるでメアリーのことなど眼中にない。

「それでは、サヨナラですの」

メアリーは。パタパタと羽を動かして、空へ飛んでいった。

地上ではまだ清田が札を眺めていた。

それから数日後。

天界福祉事務所では――

「ふええ、失敗でしたのお」

メアリーは結果報告書を読んで、驚きの声を上げた。

「そうだ。おまえは見事に失敗した」

課長天使は銀縁の眼鏡のレンズを拭きながら、言った。

「何ですの、キヨタさんはあんなに喜んでたんですのよ」

メアリーはそんなそんなとばかりに体を左右に振った。

「彼はおまえからもらったお金をほとんど使わずに、ごみ箱へ捨ててしまった
そうだ」

課長天使は眼鏡をかけた。

「どしてですの」

「おまえは使い古しの一万円札をどこから出した？」

「それはもちろん決まっていますわ。他の人の持っているお金から全て吸い上げ
ましたわ」

「バカモン！！！」

課長天使は机をドンと叩いた。

「ひええ」

メアリーは萎縮する。

「天使ともあろうものが、他人からお金を取るとは何事だ」

「でも、カチヨウサマ、一人の人を幸福にするためには、多少の犠牲も必要だと言いますわ」

「誰がそんなこと言った？」

「さあ？きつと孔子か聖徳太子か何かが――」

「そんなことはいつとらん」

課長天使はメアリーの言葉を一蹴した。「とにかく、彼は回りに人間が急に貧乏になったのを見て、自分だけ金を持つてることに、しかもその金が回りの人間から吸い上げたものと知って、良心の呵責に耐えかね、やりきれなくなつたんだ」

「難しくて、アタクシにはわかりませんですけど」

「要するに、謝りに行ってこい」

「なぜですか、アタクシはちゃんと願いを叶えて差し上げましたのよ」

「いんや、おまえの説明不足が原因だ」

「うつく、そんな、ヒドイですわ。メアリーちゃん、何も悪いこと、してないのに」

メアリーは爪を噛む。

「うるさい、とつとと行かんか」

課長天使をメアリーの襟首を掴むと、大きく振りかぶって、窓の外へ投げ飛ばした。

「ヒョエエエー」

メアリーは天空の彼方へ消えていった。

「いた、いた」

メアリーは空から公園のベンチでぼんやりと座っている清田を見つけると、静かに下へ降りた。

「キヨタさん」

メアリーは清田の隣に座って、声を掛けた。

「ああ、おまえか……」

清田はメアリーを見て、笑った。その表情はどこか冴えなかった。

「元氣ないですね」

「そんなことねえよ」

「アパート、引っ越してしまわれたんですね」

「壊れたアパートには住めないからな」

清田は空を見上げながら、言った。

「今日はいい天気ですね」

「そうだな」

メアリーは話題を振るが、ちつとも乗ってこない。

「お金、どうしましたの」

「ああ、あれか。折角、おまえにだしてもらったんだけど、使えなかったよ」

清田は寂しそうな顔でいった。

「何のですの？」

「あの後さ、町中で、金が消えたって大騒ぎになったんだ。その後、店じまいや夜逃げする連中が増えて、大変だったんだ。その一方で俺はたまりと金を持っていて。使おうと思えば、使えたけど、金を使うたびに他の人間が苦しい思いをしていると思うとね。それに警察がいる来るか恐くてたまらない毎日だった」

清田は苦笑した。

「アタクシが悪いんですのね」

「そうじゃねえよ。確かにアパートはぶつ壊されたけど、一時的にでも大金を手に入れる夢を味あわせてくれたんだ。充分だよ」

「けど、今は不幸なのでございますのでしよう」

メアリーは清田の顔をじっと見た。

「そうでもないさ。金っていうのはやっぱり働いて手に入れるものだって言うのがよくわかったからね。不当に手に入れた金は必ず誰かを不幸にする。それが分かっただけでも幸せだよ」

「それでは困ります。そうだ、もう一度、お金を出しますわ。新しいお金なら、大丈夫ですわ」

メアリーはバトンを取り出す。

「もういいよ」

清田は首を横に振った。

「何ですかの？」

メアリーにはよくわからなかった。

「もういいんだったら」

「だったら、別の願いを」

「その気持ちだけで充分だよ」

清田はメアリーの頭を撫でた。

「いいえ、かなえます」

メアリーはぼんと飛んで、ベンチから降りた。

「ロデオカネ」

メアリーは呪文を唱え、バトンをえいっと地面に振り下ろした。

ビビビツと稲妻の光線が出て、煙が上がる。

そして、すうっと煙が消えると、

「ん？」

清田はじつとそれを見た。

地面の上には靴の半分ほどの大きさの小さなお寺の鐘があった。

ふと見ると、もうメアリーの姿はなかった。

清田がその小さな鐘を拾い上げようとすると、そばに手紙があった。清田は

その場にしゃがんで、手紙を開いた。

キヨタさん、ごめんなさい。アタクシは何をしていいのかわからないけど、その魔法のおカネを差し上げます。どうぞ、受け取ってくださいませ。

メアリー

清田は鐘を手に取り、親指で軽く叩いた。

ゴオオン

不思議なことにも手にもったまま、その鐘はお寺の鐘のように響きわたった。

「ありがとよ、幸福天使さん」

清田はニコツと微笑んで、その鐘をジャンパーのポケットに入れると、公園を後にした。

空はいつのまにか真っ赤な夕焼けになっていた。

空を飛ぶ夢

「パパ、私ね、昨日、鳥さんになった夢を見たんだよ。大きな羽をいっぱい広げて、大空を飛び回ったの。楽しかったなあ。今度は一人じゃなくて、パパとママと一緒に飛びたいなあ」

ほんの数日前まで、雪子は希望に満ち溢れ、目を輝かせながら、無邪気にその話したものだ。う話したものだ。

それが今は……病室のベッドで迫り来る死をじつと待ち続けている。路上で車にはねられ、救急車でこの病院に運ばれてきてからほぼ15時間。雪子は一度たりとも目を覚まさなかった。

娘の手術を執刀した医師は「今夜が峠だ」といった。

今夜が峠……本当に今夜を乗り切れば、娘は助かるのだろうか。ベッドで眠る雪子の表情は死人そのものだ。感情もなく、伝わってくるものは何一つない。

ただ心電図だけが、雪子の生存を教えてくれるだけ。私がこんなに心配しているのに、雪子は眉一つ動かさない。

ああ、我が一人娘、雪子……

君はまだ生まれて8年しかたっていないというのに、こんな冷たい病室のベッドで一人、死を待とうというのか。

私や妻に何の別れの言葉もなく、逝ってしまうというのか。

君には未だやりたいことがいっぱいあるはずだ。人生の喜びや悲しみ、苦しみを半分も味わってはいないだろう。

お願いだ、雪子、目覚めてくれ。そして、私を「パパ」と呼んでくれ。

私は雪子の手を両手で優しく握った。

温かい……何て温かいんだ。確かに生きてる。そうか、雪子、君も戦っているんだね。生きよう生きようとしているんだね。

パパが悪かった。本当に辛いのは、パパじゃなく君なのに。

私は、雪子の顔をじっと見つめた。頭に巻かれた包帯が私の胸を強く締めつけた。

表情は相変わらず人形のように無表情だ。しかし、雪子の心の叫びは雪子の

手を通して、熱く伝わってくる。

「雪子はもし鳥になれば、どこへ行きたいんだい」

「うんとねえ、空あ」

「空か。雪子は空を自由に飛び回りたいんだね」

「それもあるけどねえ、雪子ね、もつともつと高い空に行きたいんだ」

「そんなに高いところへ行つてどうするんだい」

「おばあちゃんに会うの」

「おばあちゃんに？」

「そう。天国のおばあちゃんの所へ行つて、あやとり教えてもらうの」

「馬鹿だな、天国へ行つたら、こつちへは戻つてこれなくなるんだぞ」

「大丈夫だもん。ちゃんと夕方には帰るもん」

「駄目だよ、天国なんて」

「パパって変。これはもしもの話でしょ。パパったら、おつかしい」

はっ。

私は我に返った。どうやらうたた寝をしていたらしい。それにしても変な夢を見たものだ、全く。

ん？

ふと私の手を何かかくすぐったような気がした。見ると、雪子の小さな手が微かに動いたのだ。

私はびつくりして雪子を見た。すると雪子が目を細めながら、開けている。

「雪子、起きたのか」

私は思わず喜びの声を上げた。

「……」

雪子は口をぱくぱくと動かしたが、それが声にならず、よく聞こえない。

「何を言ってるんだい？」

私はそつと耳を雪子の口元に近づけた。

「わたしね、もうすぐ飛べるようになるんだよ」

雪子は掠れた声で言った。

「え？」

私は雪子の言葉が理解できなかつた。

「二人の天使さんがね、私をおばあちゃんのところまで案内してくれるの」

「ゆ、雪子……」

私は急に不安になった。「雪子、おばあちゃんのところへ行っては駄目だ」

「ちよつと行ってくるだけだよ」

「絶対駄目だ。雪子、お願いだから、パパの言うことを聞いておくれ」

私は雪子に哀願した。

「わたし、夢なんだ。空を飛ぶの。パパ、いいでしょ」

「やめるんだ、雪子。天国なんかに行ったら、もう会えないじゃないか」

私は泣き出しそうな声で言った。

「パパ、ごめんなさい。天使さんが急げって言うの」

「雪子！」

私は思わず雪子を抱き抱えようとした時、突然、窓から光が差し込んだ。

その光は雪子を包み込んだ。

次の瞬間、雪子の体から雪子が抜け出した。その雪子は体が半透明であった。

「パパ、空、飛んでる」

半透明の雪子は宙に浮いたまま、にっこりと笑った。

「雪子、行かないでくれ」

「行つてきます」

半透明の雪子がすうつと窓を通り抜けた。

私は急いで窓を開けた。

「ああ……」

私は絶望の声を上げた。

月へ向かつて、雪子が飛んでいく。そして雪子の両脇には二人の天使が後ろの羽を動かしながら、飛んでいた。

「ゆきこおおお!!!」

私は月夜に向かつて、叫んだ。しかし、その声は雪子に届くことなく消えた。

私はもう喋ることのないベッドに残された雪子の体をぎゅっと抱き締めた。

「雪子、おばあちゃんにあやとり、教えてもらったら、帰ってこいよ。ずっと待ってるからな」

私はその夜、子供のように泣き続けた、ただ雪子のためだけに。